

## 石川県穴水町における商業的農業

佃 治 郎

### I はじめに

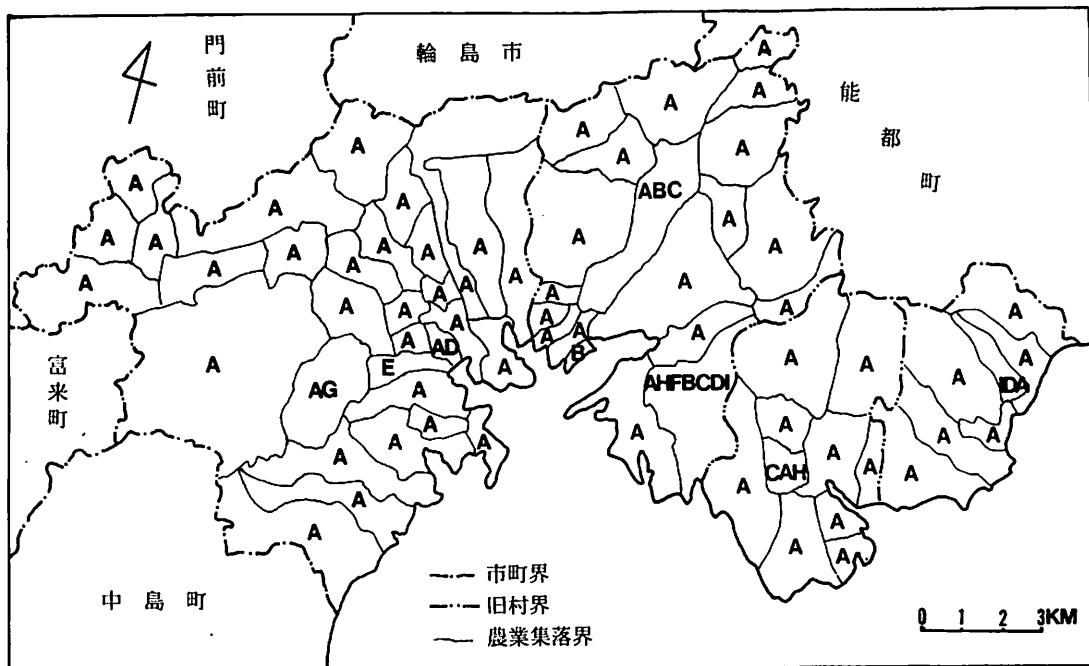
北陸地方は水稻単作地帯といわれるなかで、本県の能登は、地形的な制約もあって、水田率も比較的小さく、畑作や果樹、酪農や養鶏など畜産業も多くなっている。そこで近年における水稻以外の商品作物の生産・出荷の状況を把握し、これら商業的農業の成立条件を考察することを目的として調査を進めた。

本年度人文地理学野外実習の調査対象地となった鳳至郡穴水町は、総面積 183km<sup>2</sup>、人口 13563 人（1985年）で、能登半島の交通の要衝に位置している。町域の北西は標高 200～400 m の奥能登丘

陵であり、この山地から南東に延びる丘陵を多数の小河川が解析し、七尾湾に面する河口付近に小規模な沖積地を造っている。そして、これらの沖積地は水田に、丘陵上は畑地、樹園地が展開しているほか大部分が林地となっている。

本町の主要産業は、農林業と漁業の第 1 次産業のほか、製造業、卸・小売業なども重要な就業種となっている。

穴水町の農業を概観すると、専兼別では専業率 7.2% 148 戸（1985年）、第 1 種兼業 5.7% 117 戸、第 2 種兼業 87.1% 1788 戸となっている。そして、農業就業人口の男女比はほぼ 1:2 の割合であるが、労働力の老齢化が進行している。農用地



第 1 図 穴水町の農業集落類型 (1985年)

A 水稻 B 雑穀・いも・豆 C 工芸農作物 D 野菜類 E 果樹類 F 酪農 G 肉用牛 H 養鶏 I 養蚕

資料：北陸農政局資料より作成

注：農産物販売金額 1 位の部門別農家率を指標とした、修正ウィーバー法による。

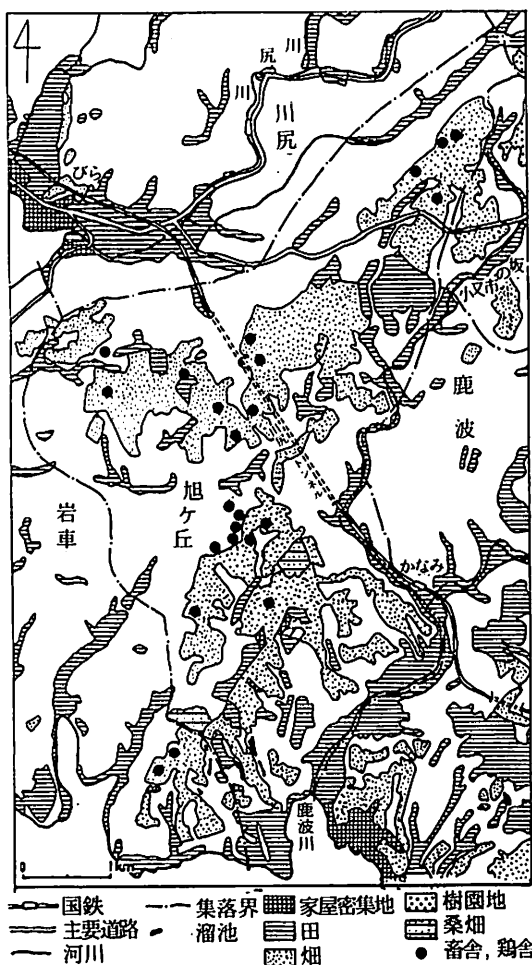
は1985年で水田1133ha(70%)、畑322ha(20%)、樹園地165ha(10%)となっているが、これら畑・樹園地は1970年から行われた国営二子山開拓建設事業によるところが大きい。

調査集落を選定するために、農産物販売金額1位の部門別農家数を指標として、農業集落単位とした1位部門別農家率の分布をみた。この分析結果をみると、第1図に示したようになり、水稲だけの集落が69集落中61集落となり、それ以外8集落である。これら8集落のうち5集落が第2次世界大戦後の開拓集落であり、9部門中7部門を示す旭ヶ丘も開拓集落の一つである。そこで旭ヶ丘を調査集落として選定し、実態調査を行った。

## Ⅱ 旭ヶ丘集落における商品生産農業の実態

**旭ヶ丘の概況** 本集落は、穴水町中心部から東へ約4kmのところに位置し、集落域はほぼ奥能登丘陵の末端部にある。土壌は丘陵部が砂岩、泥岩、礫岩層と海成段丘層から成っており、鹿波川周辺が沖積堆積層から成っている。特に丘陵部は酸性で重粘土質の赤土であり、稲作をはじめ、耕作に適しているとはいいがたい。土地利用をみると、第2図に示したように、集落域全体にわたって畑地が分布し、水田は鹿波川の沖積地などにみられる程度である。樹園地、桑畑はさらに少なく、樹園地は集落域中央よりやや北にわずかにみられ、桑畑も集落域中央から南方にわずかにみられる程度である。集落域中央部を中心に点在する農用施設のほとんどは鶏舎である。住宅は同図によると、集落域南部にわずかに存在するが、実際には農用施設の分布と同様に散居している。1985年の総戸数は74戸であるが、本集落が第2次世界大戦後の開拓によって生まれた集落であることもあって、集村形態をとっていない。

本集落の開拓は、1946年に始められた。同年、岩車から6戸の入植によって始められ、翌1947年に小松市から22戸が入植した。その後も入植戸数は増加し続け、1956年には115戸となった。入植



第2図 旭ヶ丘の土地利用(1983年)

資料：建設省国土地理院発行2万5千分の1  
地形図穴水図幅より作成

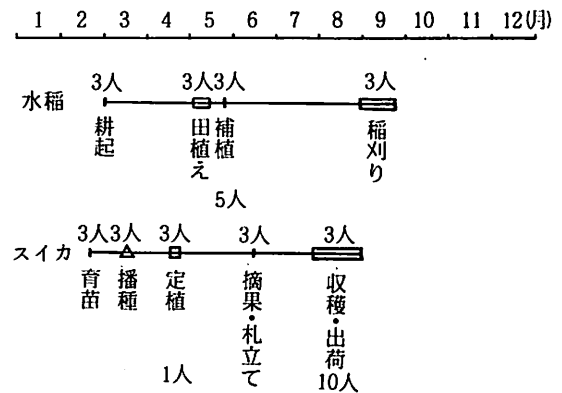
時の各戸への配分面積は、農地2ha、宅地0.1ha、薪炭林0.9haの計3haであった。当時の営農についてみると、現在のように機械力もなく、また、土壌条件も良くなかったので、わずかな家族労働力をもって2haの農地を耕作するのは、大変なことであった。2haの農地には、馬鈴薯、甘藷のいも類をはじめ、大豆、小豆などの豆類、南瓜、西瓜、とうきびなど多種類の作物を栽培した。酸性で、やせた土壌を改良するために、炭酸カルシウムを投入したり、草を刈って堆肥にしてすき込んだりもしたが、降雨があると投入した炭酸カルシ

ウムなどの肥料も流失してしまい、あまりうまくいかなかった。自給が精いっぱい、その自給をするのもままならず、苦労が重なり、病気になったり死亡したりする人も出たようである。1956年に115戸であった農家数は1970年には76戸、1980年には62戸と減少している。1985年も62戸で、約30年間のうちに、実数にして53戸減少(減少率46.1%)している。1956年と比べ、約半数の農家が離農したわけである。

1985年現在、専業14戸、第1種兼業13戸、第2種兼業35戸となっている。また、同年の総経営耕地面積は、135.19haで、うち田34.72ha、畑85.91ha、樹園地14.56haとなっている。1986年7月に行った聞き取り調査によると、(1)水稲・野菜経営、(2)野菜、(3)葉タバコ、(4)養蚕、(5)酪農、(6)養鶏の6つの営農タイプの農家が存在していた。そこで次に、この6つの営農タイプ別に商業的農業経営の実態をみる。

**水稲・野菜** このタイプに属する農家は、旭ヶ丘では1戸である。A家は集落北部に位置している。水稲と西瓜の栽培を行っている。水稲の経営耕地面積は4.5haで、うち自作地が3ha、小作地が1.5haである。自作地はA家の近辺にあり、小作地は、約8km離れた根木に0.8ha、比良に0.4ha、旭ヶ丘に0.3haある。栽培品種は、自作地が中手のこしひかり、小作地は早生ののとひかり、豊年早生である。10a当たり約480kgの収穫がある。したがって、全体では21tほど収穫される。このうち3tほどは自家用、小作料などにまわされるので、出荷されるのは約18tである。また、西瓜の栽培面積は4haあり、すべて自作地である。栽培品種は縞王で、10a当たりの収穫高は、平年でおおよそ4tである。したがって全体では約160tの収穫高である。

次に、年間の主な作業と労働力配分についてみる。これをみたものが第3図である。同図によると、水稲も西瓜も家族労働力3人でやっている。内訳は、50歳代と30歳代の男子各1人と、50歳代



第3図 水稲・野菜農家(A家)の年間の主な作業と労働力配分

資料：1986年7月における筆者の聞き取り調査より作成

注：作業の上段の人数は家族労働力で、下段の人数は1日あたりの雇用労働力である。

女子1人である。水稲作からみていくと、耕起は3月上旬から大型トラクターにより行う。田植えは5月上・中旬の10日間ほどで行う。4条植え田植え機を使用し、家族労働力のみで行っている。その後、苗の補植を行うが、5月下旬の1～2日、家族と兜地区黒崎から50歳代女子5人の雇用労働で行っている。稲刈りも田植えと同様に、家族労働力のみで行っている。機械は3条刈りコンバインを使用している。また、乾燥は比良のライスセンターで行っている。西瓜作をみると、2月下旬の育苗圃の設置、3月中旬の播種、6月中旬の摘果、札立ては、家族労働力のみで行っている。雇用労働力を使用するのは、4月中旬の定植と7月下旬から8月下旬にかけての収穫・出荷の時である。定植には、旭ヶ丘に東接する小又・市の坂から40歳代女子1人を雇用している。また収穫・出荷時には、学生アルバイトを10人雇用している。この学生アルバイトは約20日にわたって雇用している。

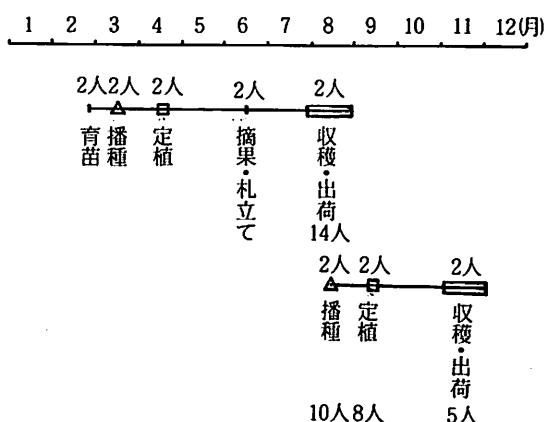
次に出荷の面をみる。水稲はライスセンター、農協を通じて出荷される。西瓜は穴水町の運送業者が8～10tトラックで、A家の軒先まで取りに来る。共同では行われていない。出荷先は、関西の京都・大阪・尼ヶ崎市場が主である。能登地方

の西瓜は赤土で栽培されているので、赤土西瓜と一般にいわれているが、商標は石川西瓜として出荷されている。市場での評価は、色の白いものがあったり、くさったもの、黄帯のあるものがあるといった苦情が、穴水町全体で年に4～5件ほどあるが、市場関係者の評判は、おおむね良好とのことである。

後継者については、前述したように30歳代の男子がおり、また経営も水稲作が安定していて、西瓜も市場での評価はおおむね良好とのことであるので、心配はしていないとのことである。

**野菜** このタイプに属する農家は2戸である。そのうちB家の農業経営についてみる。B家は集落北部に位置し、西瓜と白菜を栽培している。経営耕地面積は、西瓜が3.5haで白菜は2haである。それぞれ別の耕地に作付している。西瓜の栽培品種は竊王で、年間100tあまりの収穫がある。また白菜の栽培品種は耐病60日、白米など病気に強い小玉の品種である。白菜の収穫高は、年間50tあまりである。

B家の年間の主な作業を労働力配分についてみたものが第4図である。同図によると、西瓜も白菜も、家族労働力2人で行っている。内訳は、50歳代の男子が1人、同女子が1人である。西瓜作は、前述A家の場合と同様な作業手順である。しかし、A家が定植と収穫・出荷時に労働力を雇用しているのに対し、B家では、収穫・出荷時のみ雇用労働力を使用している。雇用労働力は14人で、うち学生アルバイトが11人、60歳代の女子が3人である。60歳代女子は、小又・市の坂から来ている。白菜は、西瓜の収穫・出荷が終了する以前の8月中旬に播種する。播種はペーパーポットに2～3粒ずつ種子をまいていく細かい作業で、しかもペーパーポットを500枚ほど使用するので、ここでも学生アルバイトを10人ほど雇用して行っている。9月中旬に畑に定植するが、これには60歳代女子8人を3～4日にわたって雇用する。また、収穫・出荷の際にも40歳代から60歳代の女子を5



第4図 野菜農家(B家)の年間の主な作業と労働力配分

資料、注は第3図に同じ

人ほど雇用している。播種の時期が西瓜とは重なるが、白菜作は定植、収穫・出荷といった忙しい作業が、それぞれ9月中旬、11月上旬から12月上旬であり、西瓜作との労働力配分は、はばうまくいっているといえる。

出荷は、西瓜も白菜も個人出荷である。西瓜の輸送方法、出荷先、市場での評価は、A家での聞き取り調査と同様であった。白菜は、穴水白菜の商標でB氏自身が3.5tトラックで金沢市の丸果まで運んでいる。市場での評価は、市場関係者の評判もまずまずで、品質や味で不評をかうことはないとのことである。

後継者については、B家には高校生の息子が1人いるが、はっきりあとを継ぐかどうかはわからないとのことである。西瓜、白菜とも肥料費や農薬費、人件費などに費用がかかり、経営が苦しいからとのことである。

**葉たばこ** このタイプに属するのは、旭ヶ丘では2戸である。ここでは隣接する川尻のC家の農家経営についてみる。C家では葉たばこのみを栽培している。経営耕地は旭ヶ丘とその周辺に3.85haある。農業粗収入は、10a当たり約36万円で、全体ではおよそ1400万円になる。

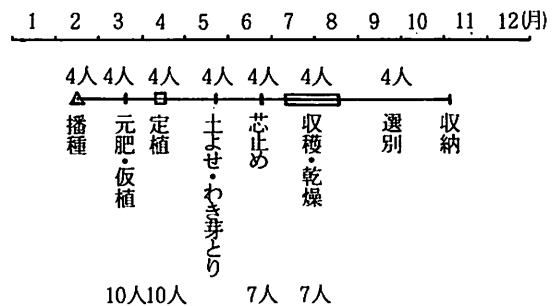
C家の年間の主な作業と労働力配分についてみたものが、第5図である。同図によると、家族労

働力は4人となっている。内訳は、60歳代男子及び同女子が各1人、30歳代男子及び同女子が各1人である。この他に雇用労働力も使用して作業を行っている。まず、2月中旬に播種を行う。播種は約40㎡のビニールハウスで家族だけで行う。3月中旬には元肥投入と仮植を行う。元肥として畑10a当たり13～14kgの窒素肥料を投入する。また仮植は、ペーパーポットを使用して行う。手押しの移植機を使用し、40cmの間かくで畑に定植していく。10a当たり約2000本ほど定植する。このときにも女子労働力を10人ほど雇用する。5月の下旬ごろ、土よせ、わき芽かきを行う。土よせは排水目的で溝を掘り、出た土を畝に上げる作業である。また、わき芽かきは葉の上部に出るわき芽を摘みとる作業で、いずれも家族労働力で行っている。6月中旬には芯止めを行う。葉を大きく成長させる目的で、茎の上部を切りとる作業である。この作業には、女子労働力を7人ほど雇用する。7月上旬から8月中旬にかけて、収穫・乾燥を行う。葉たばこ1本について18～20枚の葉が収穫される。収穫はおおよそ9回にわたって行われ、下部の方から2枚ずつ葉を収穫していく。午前中に葉は収穫されるが、その収穫された葉は、その日の午後には約7㎡の乾燥室の中につるされる。乾燥は1回につき4～5日かかり、1回で灯油をおおよそ200ℓ使用する。この収穫・乾燥作業にも女子労働力を7人ほど雇用している。8月から10月にかけては、選別や翌年の準備などを行い、11月ごろに収納する。収納は、金沢市から日本たばこ産業株式会社の人が来て行われている。

C家では1960年ごろから一貫して葉たばこ栽培を行っている。30歳代の家族労働力2人を有していることもあって、その営農意欲は高い。後継者についても心配していないとのことであった。

**養蚕** このタイプに属する農家は2戸である。このうちD家の農業経営についてみる。

D家は集落南部に位置し、養蚕と水稲作を行っている。経営面積は、桑畑が1.1ha、田が0.35ha

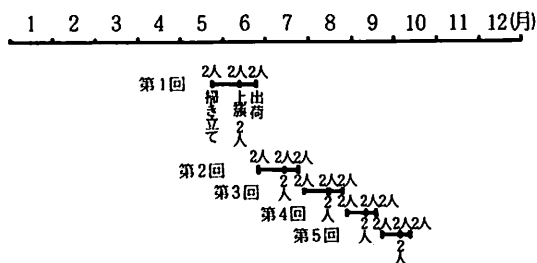


第5図 葉タバコ農家(C家)の年間の主な作業と労働力配分

資料、注は第3図に同じ

である。水稲はすべて自給用である。1.1haの桑畑のうち自作地は0.9ha、小作地は0.2haである。いずれもD家近辺にある。

D家の年間の主な作業と労働力配分についてみたものが、第6図である。ただし同図は蚕室内での作業についてみたものである。同図によると、掃立てから出荷に至る作業が、1年間に5回行われている。第1回の配蚕は5月下旬である。穴水町の北東に位置する鳳至郡柳田村の能登養蚕組合神野稚蚕飼育場から配蚕される。本年は7箱(約14万匹)うけている。3齢までは平飼いされる。4齢からは条桑飼育を行う。蚕が回転簇に入り込み、まゆをつくる上簇が始まるのは、6月中旬である。6月下旬にはまゆはずし、毛ばとりを行い、できたまゆを出荷する。この第1回の出荷とはほぼ同時期に、第2回の掃立てが行われる。第2回の出荷と第3回の掃立ては7月下旬に行われる。以下、第3回の出荷と第4回の掃立てが8月下旬、第4回の出荷と第5回の掃立てが9月下旬、第5回の出荷が10月上旬に行われる。ほぼ1ヶ月毎に上記の手順が年5回繰り返されるのである。D家の家族労働力は2人で、内訳は50歳代男子が1人、同女子が1人である。他に上簇の際にはD家近辺の主婦2人を雇用している。蚕室内での作業は5月下旬から10月上旬にかけてであるが、この他に桑畑の管理が加わる。桑畑では、3月初めから桑切りを随時行い、また除草も随時行っている。まゆの出荷は、能登養蚕組合のトラックがD家



第6図 養蚕農家(D家)の年間の主な作業と労働力配分

資料、注は第3図に同じ

の軒先までとりに来て行われる。その後河北郡津幡町にあるまゆ検定所に送られる。そこで優等、1等、2等の等級に分けられ、1kgあたり1900円から2100円でとり引きされる。

後継者については、息子が2人いるが、既に県外などで就職している。また農業収入も労働の割には高いともいえず、継げとはいえないとのことである。

**酪農** このタイプに属する農家は3戸である。このうちE家の農業経営についてみていく。E家は集落中部に位置し、搾乳牛31頭、子牛・育成牛10頭を飼育している。搾乳牛1頭からは、およそ5800kgの牛乳が1年間に搾乳される。したがってE家の年間の総生産量は約18万kgである。また牧草地は、E家の北東2kmほど離れたところに約5ha有している。

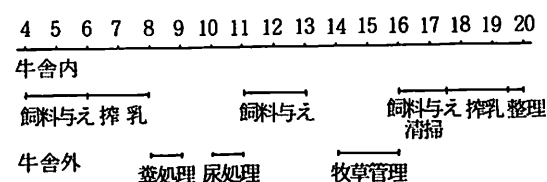
E家の一日の作業手順をみたものが第7図である。同図によると、同家の一日の就業時間は14時間である。まず4時から6時まで41頭の牛に飼料を与える。飼料は配合飼料、稲わら、ビートパルプ、ヘイキューブなどを与える。このうち配合飼料が主であり、月6tほど穴水農協が配達する。6時から8時まで搾乳を行う。牛の乳首を温湿布し、ミルカーで20ℓ入りバケットの中に搾入する。その後バケットの牛乳はバルククーラーで保存される。8時から9時までは、トラックで牛糞を牧草地へ捨てにいく。また10時から11時までは、E家近辺の畑に尿を散布する。11時から13時までは

2回目の飼料与えである。14時から16時まで牧草地で牧草管理を行う。牧草管理は時期によって異なる。16時から17時半ごろまでは3回目の飼料与えと清掃を行う。それが終わると19時半ごろまで2回目の搾乳を行い、すべての作業が終了するのは20時ごろとなる。これだけの作業を、E家では家族労働力のみで行っている。その内訳は、70歳代男子が1人、50歳代女子が1人、40歳代男子が1人である。

牧草地については、3月下旬から草作りを行う。草刈りは年3回で、5月下旬、7月下旬、10月中旬に行っている。55馬力、70馬力の大型トラクターを他の旭ヶ丘・前波の計3戸の農家と共同使用している。その他に使用する機械として、モアコンディショナー（反転機）、ブラウ、トレーラーなどもある。

集乳は、能登酪農組合の4t集乳トラックが、12時ごろE家の軒先まで来て行われている。その後この集乳トラックは、七尾市にある北陸乳業まで運送している。また乳価は1kgあたり標準で約118円（乳脂肪分3.2%）である。E家の年間総牛乳生産量は約18万kgであるので、年間の牛乳での粗収入は約2100万円となる。この他に子牛の売り上げもあるので、年間粗収入は、2500万円程度になる。しかし、飼料費に年間1200万円程度かかる上、機械の償却その他で、経営は苦しいとのことである。

後継者については、前述したように一日の労働時間が14時間と長時間にわたり、生き物相手のため一日も休むことができず、そのわりには経営が



第7図 酪農農家(E家)の1日の作業手順

資料は第3図に同じ

苦しいということもあって、現在E家の農業経営の中心となっている40歳代男子が未婚の状態にあるので、見通しは明るいとはいえない。

**養鶏** このタイプに属する農家は14戸であり、旭ヶ丘における6つのタイプの中では最も多くなっている。このタイプは、企業傘下のものと個人経営のものに大きく分かれる。前者が9戸であり、後者は5戸である。ここでみたF家は個人経営農家である。

F家は採卵鶏用舎を5棟、ひなを育てる育すう場を2棟、その他鶏糞、オガクズ用倉庫などを有している。鶏舎1棟には採卵鶏が5000羽いるので全体では25000羽飼養している。その他にひなも5000羽飼養している。これは旭ヶ丘の個人経営農家では平均的な規模であり、企業傘下の農家の経営規模と比較すると、約2倍の規模である。鶏卵の生産は1日あたり約2万個である。

鶏卵生産の手順について述べる。まず5000羽のひなを育すう場で飼育し、2ヶ月程経過した後、大すう場でさらに2ヶ月程飼育する。その後、採卵鶏用鶏舎に移しかえ、採卵を行う。採卵は生後5ヶ月目以降の成鶏について行われるが、生後13ヶ月ほどたつと卵を産む頻度が落ちてくるので、つぶして新たにひなを購入して前記最初の手順に戻る。ひなは1羽につき160円かかるので、13ヶ月毎に80万円が支出される。

一日の作業には、集卵、飼料与え、鶏糞処理などがある。集卵は午前と午後2時間ずつ行う。同作業には50歳代女子を1人恒常的に雇用し、また家族2人も加わって行っている。家族労働力の内訳は、40歳代男子1人、30歳代女子1人である。F家では、この他に70歳代男子も1人いる。70歳代男子は、育すう場の管理にあたっている。飼料与えは午後の集卵が終わった後、2時間ほどかけて行われる。飼料としては購入した配合飼料が用いられる。同作業は、前記家族労働力3人のうち、若手の2人によって行われている。鶏糞処理は、午前8時から午後5時まで随時行っている。同作

業は10歳代男子を1人恒常的に雇用して行っている。糞取り機を用いて行う。集めた鶏糞は倉庫でオガクズと混ぜ、保管する。鶏糞は1ヶ月に約75t出る。春季に近くの葉たばこ耕作者に、1tあたり3000円で売却している。

鶏卵の出荷は10kg入りケースに入れて、130ケースほど出荷している。出荷は松任市の運送業者のトラックで金沢市へ運送している。F家の軒先まで取りに来る。

将来の見通しについては、配合飼料やひな、オガクズなどの購入に支出が多く、また鶏舎などの施設の償却も行わなくてはならないので、見通しは明るくないとのことである。さらに、鶏糞の処理についても、春季に葉たばこ耕作者に売却できるといっても、それだけでは全部処理することが出来ないということで、問題があるということであった。

### Ⅲ 商業的農業経営の成立条件

**生産の側面** 本町において商業的農業経営の卓越した集落は、第2次世界大戦後の開拓によって生まれた集落であった。大戦前は未墾地であったところを開墾して集落を形成したものである。土壌はやせており、酸性の強いものであったため、農作物栽培に適しているとはいいがたかった。そのため入植者は炭酸カルシウムを投入したり堆肥をすき込んだりして土壌改良に努めたが、降雨で養分が流出するなど、なかなか成果はあがらなかった。一方、労働力も家族労働力が主体となっていて、農用機械の普及も進行していなかったため、一戸あたりの耕作規模は2ha程度のものであった。このような状況もあって、旭ヶ丘では30年ほどの間にピーク時の約半数にあたる農家が離農していった。離農の遠因には、1960年以降のいわゆる高度経済成長による他産業への就業機会の増大などもあったが、直接的にはやはり本町開拓集落における土壌など、営農条件が不良であったことに求められよう。しかし、このような状況の中でも様

々な部門で商業的農業経営を行なっている農家が存在していた。これらの農家は経営耕地規模が大きく、雇用労働力を使用し、さらに農用機械などの設備の導入が進んでいた。また、土壌条件にあまり制約を受けない養鶏農家が多く存在していた。これらのことから、本町における生産面からみた商業的農業経営の成立条件は、①経営耕地規模が比較的大きいこと、②家族労働力だけでなく雇用労働力もあること、③機械などの設備が導入されていること、④不良な土壌条件に制約されにくい営農タイプであることなどがある。しかし、経営タイプ別に、後継者が確実に存在し比較的安定しているとみられる稲・野菜農家、葉たばこ農家にしても、食糧管理法の見直し世論の高まりや外国たばこ輸入の拡大などの問題があるので、その置かれた状況は決して楽観的ではない。また酪農農家、養鶏農家でみられたように、設備導入を進め経営規模を拡大しても、それだけ償却にかかる費用も高くなり経営が苦しくなっているということもある。さらに糞処理に悩まされているということもある。したがって、上記の4条件は必要条件ということになるであろう。

**出荷の側面** 本町における商業的農産物の出荷は、県農業協同組合連合会の1農協1産地づくり運動の品目である馬鈴薯、いんげん、南瓜については共同出荷が行われている。1985年におけるそれぞれの生産量は、18t、4t、40tと、それほど大きいものではないが、単位農協としての取り組みという性格を有するため、共同出荷がなされているわけである。これに対して西瓜、白菜、牛乳、鶏卵、まゆなどは個人出荷である。各農家独自で行っているわけである。これは、経営規模が比較的大きいため、共同出荷にたよらずとも個人で出荷できるからである。また、市場という点からみると、京阪神市場、金沢市場が主となっていた。これは共同、個人という出荷形態にかわりなくである。したがって、成立条件として、京阪神市場、金沢市場の存在ということもあげられ

よう。

**農政の側面** 本町における商業的農家経営の展開には、農政とかかわるところもある。すなわち、県の農地開発公社が土地を買い上げ、国が農地造成工事を行い、農家に売却するという点においてである。国や県、町が補助を行うので、購入時の農家の自己負担金は、全費用の1割未満ですみ、購入しやすくなっている。売却するまでは確かに農家が購入しやすいようになっている。しかし、農家が購入した後の営農指導については、目立った動きはみられない。また、栗栽培地造成の際、肥沃な表土をけずり取って造成していたが、同様なことが、現在造成している土地についても続けられているようである。もともと土壌条件が劣悪なところでこのような造成がなされると、農家にとっては肥料費が高くつくわけで、問題である。しかし、ともあれ農地拡大の際、農家は農地を購入しやすかったことは事実であり、これが本町の商業的農業経営の成立に一役買っていたといえよう。

#### Ⅳ おわりに

本町における商業的農業経営についてみると、①商業的農業経営を行っている農家は、1985年で2053戸の総農家数のうち119戸である、②同農業経営が卓越するのは、第2次世界大戦後の開拓によって生まれた集落である、③同農業経営卓越地域の地形は丘陵地であり、土壌は酸性で重粘土質の赤土であるため、耕作の際には炭酸カルシウムなどの肥料を多量に投入する必要がある、④商業的農作物として、馬鈴薯、いんげん、南瓜、西瓜、白菜、葉たばこ、まゆ、牛乳、鶏卵などが生産される、⑤商業的農業経営卓越農家では、家族労働力だけでなく雇用労働力をも用いて営農している、⑥同農家では、機械力などの設備投資が進んでいる、⑦商業的農業経営卓越農家のうち、水稻+野菜複合経営農家と葉たばこ単一経営農家の経営が比較的安定している、⑧商業的農産物の出荷形態



は、個人出荷が主となっている、⑨同農産物の出荷先は、京阪神市場と金沢市場が主となっている、という諸点が明らかとなった。

また、本町における商業的農業経営の成立条件として、生産の側面では、①経営耕地規模が比較的大きいこと、②家族労働力だけでなく雇用労働力もあること、③機械などの設備が導入されていること、④不良な土壌条件に制約されない営農タイプであること、の諸点があり、出荷の側面では、

①出荷形態は共同出荷でも個人出荷でもよい、②出荷先としての京阪神市場、金沢市場の存在、の2点があり、農政の側面では、農地拡大の際、農家は農地を購入しやすかった、という点があることが明らかとなった。

本稿を作成するにあたり御指導いただいた五味武臣助教授、伊藤悟講師に深く謝意を表します。